

「をちこち散歩」は2人の筆者が6回連載します。

# 大きなものの中 に いる瞬間

作家 中上 紀なかがみ のり

一 歩一歩、石段を踏みしめながら丘を上がる。ドンドンという太鼓のような音が遠くに響いている。抑揚の激しい女の歌声がしたかと思うと、巨大な白い岩がそそり立つように目の前に現れた。

韓国ソウル。王宮からほど近い場所にある仁旺山ニワンサンに私はいた。ムーダン（巫女）も祈りに来るというこの霊山には、幸福を願う人々のための祈りの場所が幾つかあるという。歌うような祈りの声は、その祈禱場の一つである巨岩の所から聞こえてきていた。

一年ほど前、ソウルで交通事故に遭い重傷を負うという衝撃的な体験をした。一カ月間入院し、車椅子で帰国した。実はその時妊娠

初期でもあり流産が心配されていた。しかし子供は無事に生まれ、怪我も後遺症らしき症状もなく、今に至る。この霊山には、礼参りのつもりでやってきた。事故で二つの命が助かったのも、入院で長々とこの地に留まっていたのも、さらに言えば時を経たいま再びここに戻ってきたのも、何か大きな力が導いているせいである気がし、ならば祈りの風景の中に身を置いてみようと思ったのだった。

女性たちが、何度も何度も、地面にひれ伏しながら巨岩を拜んでいる。私はさらに山の上を目指した。道の脇や岩の上などで、果物や白い飯、肉などを捧げ、太鼓を叩きながら、あるいは目を閉じ静かに瞑想しながら、祈っている

人々がいる。

聖なる空気が徐々に濃くなつていくのを感じていると、ふと視線を感じた。しかし、周りを見渡しても誰もいない。気づいたら、壁のような岩が行き先を遮っている。これが頂上かと思ひ、少しがっかりしながら後ろを振り返ると、眼下には、ソウルの町並みが広がっていた。何万という無数の視線がこちらに集まっているのがわかった。

私は大きなものの中にいる。それが数多あまたの祈りの声が集まったこの山なのか、それともソウルという土地そのものなのかはわからないが、とにかく、大きなものが私を包んでいる。そのことをひしひしと感じた瞬間だった。☺